

人口統計に疑念を生じさせる高齢者人口比率一・五%増の謎

(週刊ダイヤモンド「データフォーカス」欄、2006年9月30日号)

本年7月1日、新聞各紙は、日本の65歳以上人口が昨年10月1日時点で総人口の21.0%になっていたことを伝えた。

2005年に実施された『国勢調査』の1%抽出速報が前日の6月30日に総務省から公表されたことを受けたニュース報道である。

21.0%という数字は去年秋の「敬老の日」にちなんで報道された20.0%という数字と1%だけ違っている。

今年6月公表値は全数調査の1%を抽出して推計したものだ。今後、データ処理がさらに進み、全数調査結果が公表されるさいに21.0%という推計値は修正される可能性もある。

他方、昨年秋にニュース報道された20.0%という値は、2000年10月1日時点の『国勢調査』結果(基準人口)をベースにして、その後の人口動向を『人口動態統計』や『出入国管理統計』等を利用しながら推計したものである。

両者の計数をくらべてみよう。まず、日本の総人口は昨年10月1日時点で1億2776万人であり、両者とも同じであった。

ところが65歳以上人口は昨年秋の推計では2560万人、本年6月の1%抽出速報では2682万人となっており、実に120万人強の違いがある。他方、20~34歳層の人口は、本年6月推計の方が昨年秋の推計より160万人弱だけ少ない(図1参照)。

このような違いはなぜ生じたのか。『人口動態統計』『出入国管理統計』などに問題があったのか、国勢調査への協力度が特に20~34歳層で低下したためなのか、それとも1%抽出の仕方に問題があったのか。

実数把握で1%の違いは決して小さくない。ちなみに65歳以上人口は01年に18.0%を記録し、その後は毎年0.5ポイントずつ上昇してきた(図2)。04年から05年にかけての1.5ポイント上昇は直近3年分の上昇に匹敵している。

実数把握でさえ容易でなくなりつつあるとすれば、将来推計はさらに困難となる。

統計に対する信頼を確保するためにも、右の1.5%ジャンプの理由を関係者は説明する必要がある。

(100万人)

図1 年齢5歳階層別にみた日本の人口(2005年10月1日時点)

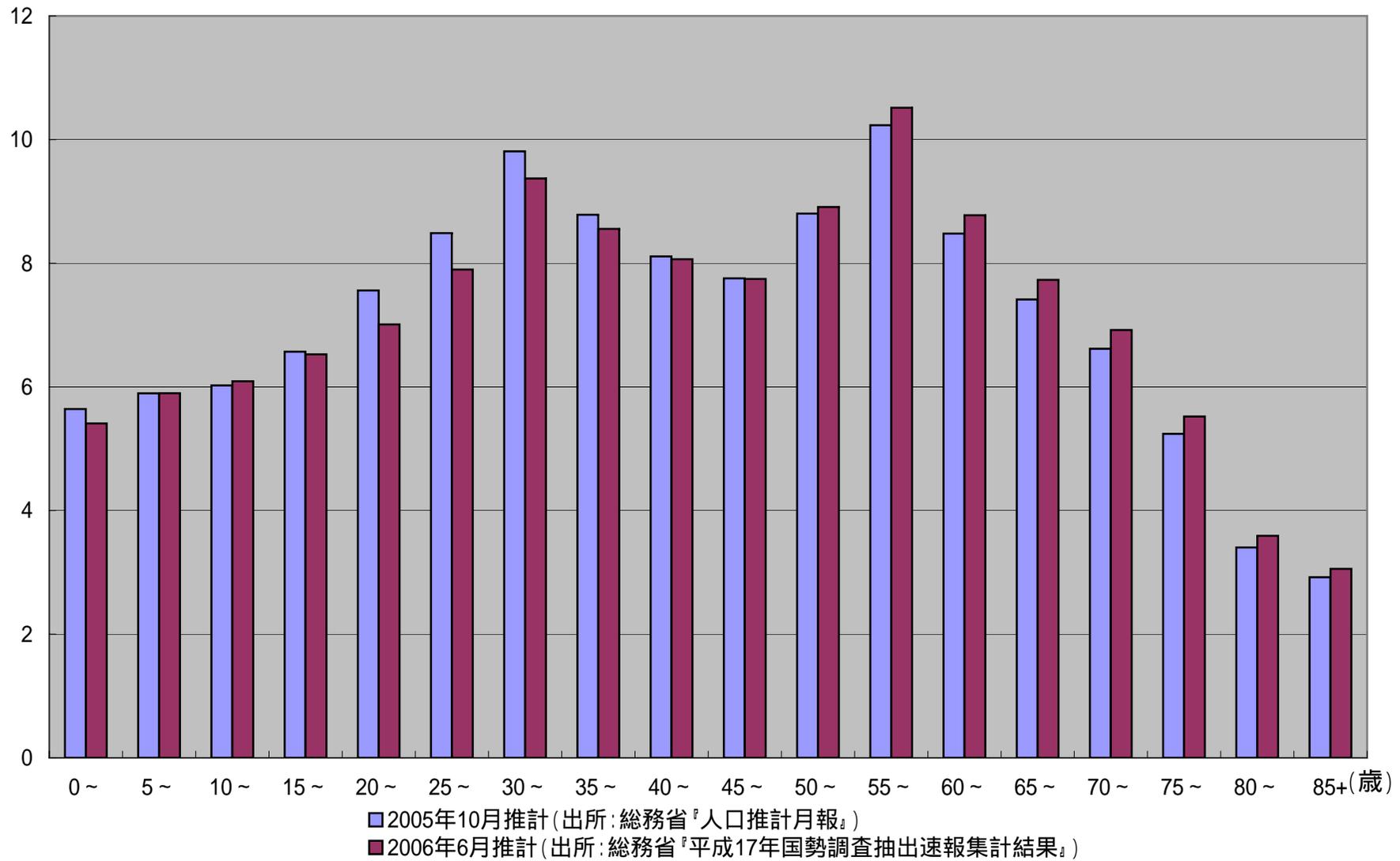


図2 日本の高齢者人口比率

